

和書類從

百八十三

			和書門
	九	五	類
	二	四	
六	四	函	
七	架	號	
〇			
冊			

庫文閣内		
二	九	和
四	五	書
函	〇	類
一	九	
六	〇	
架	冊	

内閣文庫		
番號	和	9595
冊數	670 (243)	
函號	214	39



Kodak Gray Scale

A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19



© Kodak, 2007 TM: Kodak



科書額從卷第百八十三

和歌部世八歌言

内大臣家歌合



將前

防宗

德

尤方

皇族家抄付云

女房

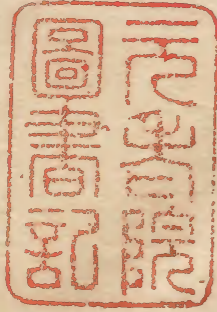
御所

檢校藤原一集

定信辨在

或

任



群書類從卷第百八十三

檢校保己一集

和歌部世八歌合四

大臣家歌合元永元年十月

題

雨沙棠

戀

尤方

皇后宮抄律云

定信朝臣

女房

威方朝臣

女將云

信賴朝臣女
園白家女房

信濃云

永實女
園白家女房

顯仲朝臣

上總公

所俊朝臣

忠房朝臣

俊隆朝臣

重基朝臣

右方

後賴朝臣

雅基朝臣

基俊朝臣

宗國朝臣

信忠朝臣

時昌朝臣

源國朝臣

道隆朝臣

雅光朝臣

忠俊朝臣

兼昌朝臣

為實朝臣

判者

俊杉朝臣

基俊朝臣

一番時雨

尤 友人為勝

皇后宮掾

左

俊杉朝臣

此川為以之志有之室向是之穴乃此之穴乃也少
俊杉公傳此穴乃心相意也之穴乃之穴乃也

難之と云は... 若し山より... 子よ身を... 御方左勝... 守一... 右... 出... 二番

二番
尤 後持 基勝

女房

わ... 杖... 行...

右

歌 國朝臣

奴... 後... 相... 次... 出... 濡... 多... 妙... 云...

卷百十三

八増少之也侍人

三番

尤 俊勝

少將公

時雨の多かぬ身は神筆も好む物も有流

右 基勝

雅兼朝臣

冬く積り敷く庭はあふ葉は時雨もよみ山乃侍

後云は侍はては多かぬ身はあふり

衣は侍り多かぬ身はあふり

少や衣は侍り多かぬ身はあふり

一一家は侍り多かぬ身はあふり

事又さし一葉は歌ふあふり後乃

一葉は歌ふあふり後乃

みもなる叶は歌ふあふり後乃

一葉は歌ふあふり後乃

うもるさし一葉は歌ふあふり後乃

移て負ふも其葉は歌ふあふり後乃

松うさし一葉は歌ふあふり後乃

る葉のあふり一葉は歌ふあふり後乃

一葉は歌ふあふり一葉は歌ふあふり

四番

左 基勝

顯仲朝臣

水鳥式之筆乃名之為人指をさむと銘いしは

右 俊勝

道隆朝臣

是之申り筆式小字は極く真下流なる時雨一文字
後云水鳥乃其物ハ之つとて之指式也
之字を無下にして之申り次方筆式を以て
之を其物と申す也其申す事と過之ハ其
勝之申り人基云水鳥其者物ハ之とて之
申す是之其建を右に之の筆式申す事
よる人其申す事と春雨四月雨申す事

五番

左 俊持

上総云

時雨ハ其水鳥水鳥之建ハ人其申す事
右 基勝

基俊朝臣

其申す事枯行を以て是ハ之申す事也
後云其歌水鳥其申す事也其申す事也
其申す事也其申す事也其申す事也
其申す事也其申す事也其申す事也

基云晴由山の霞乃小笠古秋のり之を以て詞
あつてくし海をいふ可水色を美玉を流る
り之をいふ名なるあふん出ちとて侍のいふ
自らいふまゝ侍人といふ被衣の只の
よみ常のいふていふていふていふていふて
向ふ流るなり朽葉をせははせん一會は
とあまきくあはれきくあはれきくあはれきく

六番

尤 基持

師信朝臣

はせりて穂乃たもきの流るる見もははらまの晴由

右 佐勝

雅光朝臣

木代葉のこぼるるをさすかひし晴由人のまゝ一葉
後云歌穂たもたもたもたもたもたもたもたも
うの晴由とてたもたもたもたもたもたもたも
雨打哀輝と云
くさつたるまわさうさも哥ふよまもたもたもたも
わあふらんてはてはてはてはてはてはてはてはて
とてはてはてはてはてはてはてはてはてはてはて
心もあふんたはてはてはてはてはてはてはてはて
木代葉のまゝたもたもたもたもたもたもたもたも

風の多よかといふ是れをきくも
あともたふたにかまはしき
たまやぬきほしき
らん時雨さうらう
うらめしくえい
る車はあまのや
多は心とや
打定ぬかき
うたへ横さ
ふさう
たふた

七番
尤
定信
宗國
たふた

七番
尤
定信
宗國
たふた

後云前より言ひきくし被流るる所の言は
法也河の事とて名次歌をいふ所の言は
末代七文字を抄ひてくるをいふ言は
くくくくくくくくくくくくくくくくくく
の夜すれくくくくくくくくくくくくく
侍物ふ被流るるんも言はくく侍物はく
杜あしくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく

八番

尤 為判右為侍

威方物也

神無月と云ふ所の言はくくくくくくく

右

右修物也

くく月晴あくくくくくくくくくくく
後云くくくく神無月と云ふ所の言は
くく山と云ふ神無月と云ふ所の言は
くく護文や河の事とて名次歌をいふ所の言は
くくの文字あくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく
くくくくくくくくくくくくくくくくく

向きの事一社あり其基云云

九番

尤 後持基勝

信濃公

社長月娘行人もはくもなるる

右

信右衛門

くぬ山つる高向寺社長月娘行人もはくもなるる
後云云云云社長月娘行人もはくもなるる
くぬ山つる高向寺社長月娘行人もはくもなるる
後云云云云社長月娘行人もはくもなるる

十番

尤 後持

忠房朝臣

波云云云云社長月娘行人もはくもなるる

右 基勝

兼昌の位

四月の末、武山の高根より、ふたりの初詣に
 後、まゝに時増し、まゝにまゝに、まゝに
 起るゝまゝに、明かすまゝに、まゝに、まゝに
 あり、初詣のまゝに、まゝに、まゝに、まゝに
 ぬき、まゝに、起るゝまゝに、まゝに、まゝに
 乃、人傳へ、社寺のまゝに、まゝに、まゝに、まゝに
 出向、後、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに
 其、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに
 一、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに

高根を、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに
 る、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに
 其、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに
 乃、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに
 出向、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに
 其、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに
 一、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに
 春、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに
 乃、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに
 一、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに、まゝに

とも違ふぬるは時由のふりあはる
のうへに傳へん

十一番

尤

後澄初辰

さあつては使のせうにのりも時由の雨ふりては

右 右判為勝

時昌初辰

はつ時由多信一の案状を以て為す梢のさき

後云ふぬれさうにさうてはさうにさうに

のせうにさうにさうにさうにさうにさうに

はさうにさうにさうにさうにさうにさうに

引くさうにさうにさうにさうにさうにさうに

かど清きさうにさうにさうにさうにさうに

後とさうにさうにさうにさうにさうにさうに

四條大御所式と満所重とさうにさうにさうに

さうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに

さうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに

さうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに

さうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに

はさうにさうにさうにさうにさうにさうにさうに

十二番

十九 佐勝

重基朝臣

松原江心之流之より時雨に由りてかたれも

右 基勝

為実朝臣

山家六のころより業次教受てしを述ぶるは

俊云松原乃より六のころより業次教受てし

業次をうけりては山家六のころより業次

かたれもかたれも六のころより業次

かたれもかたれも六のころより業次

かたれもかたれも六のころより業次

かたれもかたれも六のころより業次

谷入名を成せりては山家六のころより業次

かたれもかたれも六のころより業次

かたれもかたれも六のころより業次

かたれもかたれも六のころより業次

かたれもかたれも六のころより業次

一番 妙菊

左 五判為勝

上徳云

業次名を成せりては山家六のころより業次

右 俊杉朝臣

山乃河の流をより業次をうけりては山家六のころより業次

後云前奇ハ何ドノカニ被テ其ノ事ノ由ルニ
 其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ
 其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ
 其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ
 其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ
 其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ
 其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ
 其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ
 其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ

其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ
 其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ
 其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ

二番 尤

其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ
 其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ
 其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ

其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ
 其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ
 其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ其ノ事ノ由ルニ

わくをるるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと

又字はるるおと傳ふまはけりてくくるといふ
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと
くくるといふ河の川をくくるといふと

小人出らんと志侍ら古希一可もこれと
家終りしと又教るを文字に書かば
急侍らねと程家しと心もぬるまじら
うし侍子

三番

左

歌侍胡臣

万代の秋のしるふを菊衣ひをたふす
右 基侍胡臣

と相ふれはさう霜をいふは菊衣ひをたふす
侍ら公希祝ふとをそとをそとをそとをそと

次侍小の菊衣ひとつる中しるふ
白の少きと古希よ付く心ふよ菊衣ひと
中しる菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひ
はさるよと菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひ
中しる菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひ
の秋のしるふと菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひ
と菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひ
色のふと菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひ
よらひと菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひ
つる菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひと菊衣ひ

福のふくみ業を頼む海に舟はついでに
舟のふくみ業を頼む海に舟はついでに
社に舟のふくみ業を頼む海に舟はついでに
舟のふくみ業を頼む海に舟はついでに
舟のふくみ業を頼む海に舟はついでに

五番

尤 後侍基勝

信濃公

秋はくも桐枯れ葉もまらぬ
女房の心もあはれ

白きくも後ひまらふ人のあはれ
後云ふ秋はくも桐枯れ葉もまらぬ
女房の心もあはれ
秋はくも桐枯れ葉もまらぬ
女房の心もあはれ
秋はくも桐枯れ葉もまらぬ
女房の心もあはれ
秋はくも桐枯れ葉もまらぬ
女房の心もあはれ

あはれ詞もそは侍りたるやふみ侍りたれ
右式部内偏上兼式部卿少輔兼左大臣
の侍りくよふ侍りたる男女のまゝふまゝに
恨やりたるらんらん之題の心深し侍りたれ
尤乃勝つ侍りたる侍りたる

六番

尤 後抄

一 女将云

侍行を向ふまゝに初侍りたる侍りたる侍りたる

右 基勝

信忠朝臣

つゝ名に公離よむる菊あはれ侍りたる侍りたる侍りたる

後云侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる
と又侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる
先つ侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる
つゝ名に公離よむる菊あはれ侍りたる侍りたる侍りたる
物も侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる
よあ侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる
侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる
侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる
侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる侍りたる

七番

侍りたる

侍りたる

九 基勝

定信朝臣

我々乃葉分りて其のくを以て難を以てし

右 俊勝

惟光朝臣

一 毛括るるのさき白き其福を以て惜す
俊云亦奇ましくそのまを思括りて後を以て
のまを以てし其のくを以てし其のくを以てし
中は其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし
く其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし
其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし
其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし

八番

九 基勝 基持

威方朝臣

其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし
其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし
其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし
其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし
其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし
其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし
其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし

右

道隆朝臣

其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし
其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし
其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし
其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし
其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし
其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし
其のくを以てし其のくを以てし其のくを以てし

乃在... 宗國... 十一... 十番... 九番... 八尤... 七... 六... 五... 四... 三... 二... 一... 惟勝...

九番 一 八尤 基持

秋... 右 惟勝... 重基朝臣

十一 備云秋... 十番... 九番... 八尤... 宗國釣臣

惟... 宗國釣臣

右 志判為勝

兼昌朝臣

菊はくさしのまゝはくさくさなるを霜と拂ふと物も
下はくさくさなるを霜と拂ふと物も
文字はくさくさなるを霜と拂ふと物も
はくさくさなるを霜と拂ふと物も
はくさくさなるを霜と拂ふと物も
はくさくさなるを霜と拂ふと物も
はくさくさなるを霜と拂ふと物も
はくさくさなるを霜と拂ふと物も

十一番

九 志判力持

信造公

六 志判力持

右 時昌朝臣

霜はくさくさなるを霜と拂ふと物も
霜はくさくさなるを霜と拂ふと物も
霜はくさくさなるを霜と拂ふと物も
霜はくさくさなるを霜と拂ふと物も
霜はくさくさなるを霜と拂ふと物も
霜はくさくさなるを霜と拂ふと物も
霜はくさくさなるを霜と拂ふと物も
霜はくさくさなるを霜と拂ふと物も
霜はくさくさなるを霜と拂ふと物も
霜はくさくさなるを霜と拂ふと物も

中ふふふ公必同てふふふ之侍ふふふの業
ふふふ侍進ふ何事も勝負たふふふ
は持たふふふ

十二番

尤

後陸船后

霜枯福ひゆの村裏ふ縁朝糸先うふふ

右

五判お勝

為実物后

置一もふふふ海ふふ義ふふ福ふふふふ
後ふふふ舟無指舟中ひふふふふふふふ
ふふふ舟運は進ふふふふふふふふふふふ

ふふふ霜無くふふふふふふふふふふ
ふふふふふふふふふふふふふふふふ
後ふふふ舟無指舟中ひふふふふふふふ
ふふふ舟運は進ふふふふふふふふふふふ

一番 戀

尤

後勝

折付云

後ふふふく室八島乃煙ふふ指舟侍の恋はすふ

右 基勝

頼國朝臣

盃に酒を酌み交はしむるも
 後云ふは後をたぐひて
 せんは室中にも実ふ火
 野中の清き水ありし
 くもあかりを梅といふ
 実た梅とぬき讀まは
 や奇しくありしを
 かりしれとむるも
 盃に酒を酌み交はしむるも

切なり酒もあしく
 りる家又盃の
 せん是は
 尤奇の事
 の八嶋乃焼
 六何れ
 野よあり二
 なるは
 ありし
 しくといふ

惟成奇之風市けい家入りし式多煙心
 のしるふ事よりかき讀む古語よりしるる
 其れを法問に徹せしめたるを煙海に
 名先しとて久しうし傳りし語を燒心
 を本意とせしむるは讀むに傳りし語を
 しく尋中にも見せしむるは其れを
 人語にあつて右奇聖の言をくわゆる人
 事とてとるもの言をくわゆる人語とて
 能くしるるは傳りし語をくわゆる人語
 とてしるるは讀むに傳りし語をくわゆる人語

其れはあひしる事とてあるは傳りし語を
 かくるひしる事本文有るは傳りし語を
 解する事とて又いふは傳りし語をくわゆる人語
 ありしるるは傳りし語をくわゆる人語
 其れ三年間を傳りし語をくわゆる人語
 傳りし若法又は無明に解ふとて傳りし語
 其れをくわゆる世もくは傳りし語をくわゆる人語
 其れ中をくわゆる方かしく尤歌海に傳りし語をくわゆる人語
 其れをくわゆる方かしく尤歌海に傳りし語をくわゆる人語

二番

卷百三

三

尤 後持

後頼朝臣

口傳の如く行ふ事ありて人々みんむ

右 基勝

基後朝臣

後持の如く行ふ事ありて人々みんむ
後云ふ如く行ふ事ありて人々みんむ
傳の如く行ふ事ありて人々みんむ
尊大福同娘は遠初治の時沖に居りて
流し掃くは年々流し居りて流し居りて
小達より心の人々の末に句より人々は
とありて居りて居りて居りて居りて居りて

公なるやにみゆ讀人より約中へ首承り
そをいふありて居りて居りて居りて居りて
基云は傳の如く讀する人々の如く居りて居りて
み傳の如く居りて居りて居りて居りて居りて
一詞の如く居りて居りて居りて居りて居りて
中なるは事なく諸家集並寄合ふるも
初より居りて居りて居りて居りて居りて
又の如く居りて居りて居りて居りて居りて
み出の如く居りて居りて居りて居りて居りて
世統と云ふ文は居りて居りて居りて居りて

小次郎白く青い雲の如くひくひく白くひくひく
 みよと社ひひきける雲の如くひくひくひくひく
 井の如くひくひくひくひくひくひくひくひくひく
 淮南鶴とてふ入侍の如くひくひくひくひくひく
 必細き源とて相替經とて文は清く六百八十集
 雌雄あひひくひくひくひくひくひくひくひくひく
 ひくひくひくひくひくひくひくひくひくひくひく
 ふくひくひくひくひくひくひくひくひくひくひく
 古くもひくひくひくひくひくひくひくひくひくひく
 色くひくひくひくひくひくひくひくひくひくひく

三番

尤 与判の勝

女房

いろも下とて草の如くひくひくひくひくひくひく
 右 権為の臣

僧とて青い雲の如くひくひくひくひくひくひく
 女房の如くひくひくひくひくひくひくひくひくひく
 其とて青い雲の如くひくひくひくひくひくひくひく

ふりしき下るる花はさやうしうらみま

四番

尤 右判の勝

上徳云

あひまの君の空の日月のほ及ぬ月を彩

右

羽仲朝臣

いづれ神のきりくさるるも違ふ身の身

後云奇人日月のくさるる徳の奇合り

ゆりぬるもさるるさるるも後奇人

人よ知れしき奇人なほはらへんや

三奇人入るる又男もさるるさるる人

あつと後母あつと人よかふくみ

てまゝあつと娘もあつと角のくさるる

奇人あつと日月のくさるる文字のき

るる娘もあつと侍もあつと天曆奇

合小中務の雲井日月のくさるる

まゝあつとあつとあつとあつと侍も

あつとあつとあつとあつと侍も

あつとあつとあつとあつと侍も

あつとあつとあつとあつと侍も

さるるちしつりいばさるるちしつりい
と雲井の月ととりしつりい

五番

尤 後好

師俊朝臣

はさるるちのちのしつりいばさるるちしつりい

右 基勝

定信朝臣

道中成まほのけし年好まはつるははのちのち
後云云奇姿河をよみしつりい
後奇の道ととさるるちしつりい
さるるちしつりい

さるるちのちのしつりいばさるるちしつりい
はさるるちのちのしつりいばさるるちしつりい
詞傳あさるるちのちのしつりい
句しつりい
さるるちのちのしつりいばさるるちしつりい
さるるちのちのしつりいばさるるちしつりい
さるるちのちのしつりいばさるるちしつりい
さるるちのちのしつりいばさるるちしつりい
さるるちのちのしつりいばさるるちしつりい
さるるちのちのしつりいばさるるちしつりい
さるるちのちのしつりいばさるるちしつりい

実小北一くさ次白式一後え小波のりあぬ
目さるるひささき一ふみ侍りの小町の
奇小北ひささきふささきふささきふささき
さうさき一

六番

尤 後持

廿将云

うかりさけ小北一さきねえささき一とくねえ
右 基勝 信濃云

後云尤右左ふはせり雅とえとぬあ一志の常

の事さき八部一と中一とく基云是八部も
くさき一さき一さき一さき一さき一さき一
さき一さき一さき一さき一さき一

七番

尤

兼昌朝臣

徳と一と中一ひささき一と中一とく基云是八部も
右 基判為勝 雅光朝臣

玉藻うら志ふ式浦の巻さきもさき一神八部さき
後云一後云一と中一とく基云是八部も
と中一とく基云是八部も

兼昌朝臣

三十一

の詞さるしき中はまをたててる事也基
公是も年をひく事ふあねとあ願ふ事
波の下の式ありてはくしは作しけみ
え侍る小忠るの浦の雲よりもる事
神ありし事ありま侍りてはくし事

八番

尤 燈将基勝

感方朝臣

山吹ふる月のはつてふみしはくし事

右

信忠朝臣

戀ふ事皆人の事も恋ふ事や恋ふ事あり

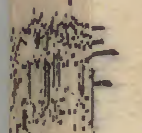
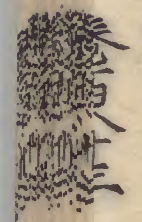
借ふ事さるる事さるる事さるる事
さるる事さるる事さるる事
字はさるる事さるる事
や基も尤事さるる事
志川の事さるる事
さるる事さるる事
みる事さるる事

九番

尤 基勝

道隆朝臣

逢ふ事さるる事さるる事



右 俊房

忠澄朝臣

此の山にありて波のりて穴のふらふらなる常成なる
俊のふらふらなる波のりて穴のふらふらなる常成なる
此の山にありて波のりて穴のふらふらなる常成なる
俊のふらふらなる波のりて穴のふらふらなる常成なる
此の山にありて波のりて穴のふらふらなる常成なる
俊のふらふらなる波のりて穴のふらふらなる常成なる
此の山にありて波のりて穴のふらふらなる常成なる
俊のふらふらなる波のりて穴のふらふらなる常成なる
此の山にありて波のりて穴のふらふらなる常成なる
俊のふらふらなる波のりて穴のふらふらなる常成なる

十番

尤 俊房基徳

忠房朝臣

右

宗國朝臣

此の山にありて波のりて穴のふらふらなる常成なる
俊のふらふらなる波のりて穴のふらふらなる常成なる
此の山にありて波のりて穴のふらふらなる常成なる
俊のふらふらなる波のりて穴のふらふらなる常成なる
此の山にありて波のりて穴のふらふらなる常成なる
俊のふらふらなる波のりて穴のふらふらなる常成なる
此の山にありて波のりて穴のふらふらなる常成なる
俊のふらふらなる波のりて穴のふらふらなる常成なる
此の山にありて波のりて穴のふらふらなる常成なる
俊のふらふらなる波のりて穴のふらふらなる常成なる

あまのうきをみせしむる侍はあまのうきをみせしむる侍
はあまのうきをみせしむる侍はあまのうきをみせしむる侍

十一番

左 後勝基持

重基朝臣

遠くはあまのうきをみせしむる侍はあまのうきをみせしむる侍

右 後澄朝臣

あまのうきをみせしむる侍はあまのうきをみせしむる侍
あまのうきをみせしむる侍はあまのうきをみせしむる侍
あまのうきをみせしむる侍はあまのうきをみせしむる侍
あまのうきをみせしむる侍はあまのうきをみせしむる侍

十二番

左 後勝基持 為実朝臣

右 基持 時昌朝臣

あまのうきをみせしむる侍はあまのうきをみせしむる侍
あまのうきをみせしむる侍はあまのうきをみせしむる侍
あまのうきをみせしむる侍はあまのうきをみせしむる侍
あまのうきをみせしむる侍はあまのうきをみせしむる侍

ふりて流るるに於ては浪を以てくせり其
まゝに流るるに於ては浪を以てくせり其
まゝに流るるに於ては浪を以てくせり其
まゝに流るるに於ては浪を以てくせり其
まゝに流るるに於ては浪を以てくせり其
まゝに流るるに於ては浪を以てくせり其
まゝに流るるに於ては浪を以てくせり其
まゝに流るるに於ては浪を以てくせり其

基備判奥より献する事

元永元年十月内大臣家歌合以古馬二年授合

元永元年十月内大臣家歌合以古馬二年授合

内大臣歌合 元永二年七月

判者

修理大夫藤原顯季朝臣

左方人

備後守季通朝臣

無名女房 実内大臣殿

刑部女補尹時

為實

左方侍部

左近衛權女補顯國

皇后宮侍

馬權頭威家

上総系

治部大補雅光

宮内女補宗國